No.33 March 2002

特集 9.11 以後—宗教からの発言

Womanspirit

逐次刊行物
14 3.25
国立国会図書館
センター

フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集　9・11以後 —宗教からの発言—

フェミニズムと宗教は無力か　……小松加代子　1
どっちを向いても気が滅入る　……宮澤　邦子　4
剣を打ちかえて鋤とし、槍を打ちかえて鎌とし……斉藤　七子　6
Oさんへ　II　他者の聖性を破壊することなく　……申　英子　8
ブッシュ大統領への手紙　……岩田　澄江　13
政治的無視が引き起こすこと　……平野　裕子　14
黙　想 —メディアからの情報　……牧　律　17
兵戈無用、兵隊も武器もいらない！ —テロにも報復にも反対！—　……藤谷不三枝　18
言説は無効か　……奥田　暁子　20
混　沌　……千葉　悦子　22
二〇〇一・九・一一、私の願いとして　……渡辺　秀子　23
アメリカ「帝国」はいずこへ　……近藤　和子　24
戦争のグローバリゼーション　……横山　杉子　29

女と国家—観念による呪縛
B 三つ巴の性（二）　……河野　信子　33

男性僧侶のアイデンティティー？　……日比野由利　35
チュウイ、チュウイ　……勝又　美保　37
本の紹介　……下村美恵子　40
活動報告・会計報告　……34・41
編集後記　……41

フェミニズムと宗教は無力か

小松加代子

九・一一以降について述べることが、とても難しいのはなぜだろうか。宗教を考える者にとって、人を殺すことは何があっても悪いことであるのは、はっきりしているのに。「テロは悪い」「戦争は悪い」、言ってみればこんなに簡単で明白なことなのに、それが力を持たないとは、いったいどういうことなのだろうか。

アメリカ同時多発テロの画面をテレビで見て、感じたのは怒りではなかった。何より人の命を軽んずる人間のおぞましさへの吐き気であった。それなのに、すぐに報復を叫ぶ声が聞こえてきた。報復を唱える怒りはどこから生じてくるのだろうか。九・一一以降、それまでよく読んでいたアメリカの冒険小説が現実と重なっているかのような思いがした。主人公が善の代表で、悪者の策略を覆すというワンパターン、その一辺倒な書き方がじわじわと身にしみて気になるようになった。水戸黄門、大岡越前、スーパーマン、そして現在に続くさまざまな勧善懲悪の映画。こうしたドラマはいつになっても衰えぬ人気がある。ドラマの中では、パターンはいつもたいてい同じなのに、それでも最後に正義が為されることを期待して見てしまう。それはなぜだろうか。

そこにはこの物語が提供する情報に左右され、動かされている私たちがいる。たいていの話にはヒーローが登場し、社会の中の不正と闘うことになっている。そしてヒーローが助ける無実の人々がいて、そうした無実の人を苦しめる悪人が登場する。はっきりとした善と悪との戦いである。こうした勧善懲悪の単純な劇の中では、まず冤罪の人が苦しんでいることが示され、その無念を晴らすために、正義の使者が影で陰謀を企てている悪者を罰するのである。ドラマの中に何らかの不公平の存在がしっかりと分かるように示されているために、見ている側は、はっきりと正しい側と悪い側とを区別することができ、正しい側に立って怒りを覚える。そしてヒーローに不公正の是正を期待する。

不公平・不正があると理解している場合には、私たちはその不正が正されることを期待することは当然であり、自然だと思う。そして、不正の根源である悪者たちがその報いを受けるよう期待する。冤罪をかけられていた人が救われるためには、その人たちを陥れた悪者には厳しい罰を受けさせなければならない。しかもその悪者は、我欲のかたまりでしかないのだ、というわけである。しかし、落ち着いて考えてみれば、私たちが不公平と認識する根拠となる情報は、同じ物語

の中で提供されたものなのである。上記のようなドラマを見ているときに、善と悪との区別は明白であるように思われるし、悪者に対して怒りを覚えることは自然であるかのように感じている。しかし、その区別をする私たちの認識は、与えられたドラマの筋に依存している。

同じようなことが、今回も起こっていなかっただろうか。私たちは、テロの親玉としてすぐに、ビンラディンの存在を知らされる。しかもビンラディンを中心に国際的な関連組織があることが示唆される。そして、今回の事件がビンラディンによって起こされても不思議はないほど、潤沢な資金を背景に、ビンラディンが影の世界で力を持っていると語られる。

さらに、そうした情報に加えて、ビンラディン、タリバンに見られるような、イスラム過激派の異常さが伝えられる。バーミヤンの仏像などの偶像を破壊する、テレビもラジオも音楽も認めない、女性が家の外に出ることを認めない、など、彼らの行動規範には、狂信的と呼んでもいいような、理解できない面がある。そして、もともとイスラムに関する知識は圧倒的に足りない。知識の不足は、不気味な印象を作り出す働きをする。よく理解できないのは、相手に問題があるからだ、というわけである。

私たちは常に条件付の情報の中に生きている。しかし、偏った情報が一つの物語を作り出しているとき、よほど注意しないとそれに気づくことは難しい。そうした神話ともいうべき物語を相対化して、無化する視点が必要となってくる。

新聞に掲載された岡真理さんの論文は、アメリカの同時多発テロで死亡した人数よりも多くの人々が世界各地でテロの被害にあってきたことを無視した言動が闊歩していることを指摘し、一つの国の視点のみから見ることの偽善性を明らかにすると同時に、テロ前からあった問題をテロの問題と混同すべきではないと主張する。また、アフガニスタンの現状を自分の目で見て判断しようとして実行した、辺見庸さんや瀬戸内寂聴さんは、新聞記事や著作の中で、テロとは無関係な一般の人々が苦しめられていることを指摘している。こうした人々の意見が、平衡感覚を保たせてくれる。

また、先日（二月二日）ＮＨＫで放映された番組「帰郷アフガニスタン」では、カンダハル生まれニューヨーク育ちの女性が、アフガニスタン攻撃の後、カブールを訪れ、親族が戦争の被害にあった事実に直面する。タリバンを追い払ってくれたことには感謝をするが、なぜ一般の人々が攻撃されなければならなかったのか、と米軍兵士に問うのだが、私の友達も世界貿易センターで殺された、と答えるばかりだった。米軍の報復戦争の中にも、無差別殺戮があったことは確かであ

る。「テロと報復戦争」という筋書きは、アメリカという大国が力で持って怒りを表した、強国だからこその物語ではなかっただろうか。

私たちは、勧善懲悪、善悪二元論の単純な物語に安住してはならないと思う。そして同時に、その物語の主人公が国家であってはならないと思う。国家に代表者としての権限を認めてはならない。被害者の家族の中に、「もう争いはやめてほしい」「無駄な人殺しはやめてほしい」という声を聞き、アメリカの報復戦争が、そうした被害者の家族の声を代弁するとは限らないことを、瀬戸内寂聴さんや竹下節子さんは、指摘している。アメリカ政府は被害者を代弁しているわけではない。同様に、オサマ・ビンラディンは、アフガニスタンやイスラムを代表しているわけではない。そして、日本政府は私たち国民全員の声を代弁してはいない。

無力に見えるフェミニズムと私の考える宗教。ただ、力をもっていないがために、強者の正当化にもならずに、そして語り続ける仕事は残っている。

フェミニズムは神話との戦いを地道に続けてきた経験を、そして弱者の経験を持っている。強い男性が女性の代弁者であったことはないことを知っている。声を荒げて怒鳴る人たちの足元で、でも違うとつぶやく経験を持っている。そのつぶやきを声に出す練習をしている。誰もが生きやすい世界を作ることが目標であるフェミニズムから見れば、戦争がそれをもたらさないことは明らかである。力は強者にうぬぼれをもたらすだけで、弱者を守ってはくれなかったことを覚えている。

テロを止めることもできなければ、報復戦争を止めることもできなかった宗教。姦淫の烙印をおされた女に罪ある者のみが石を投げよと告げたイエスの教えにのっとっているはずのキリスト教会もキリスト教徒も戦いを止めることはできなかった。しかし、弱者の側に立つ宗教は、誰にでも最良のものと最悪のものがあること、テロ行為を行う要素が自分の中にもあることを認め、同じ苦しみを持った人が他にもいることを知り、怨みに怨みを持って応じない、と語り続けなければならない。あるがままの自分を探そうとしてきた人は、ある日突然自分が正義の味方になってしまうはずがないことが分かっているはずである。宗教はひたすらに、人を殺してはならない、と言い続けなければならないのだと思う。

どっちを向いても気が滅入る

宮澤　邦子

アフガニスタンの空爆以来、テレビを見るのがいやになった。この気持ち、共有して下さる方が多いのではないだろうか？　もっとも、九月十一日の夜は、かなり遅くまでテレビの前に釘づけになってしまった。ちょうどその一月前に、アメリカを旅行していて、アメリカン航空の国内線にはずいぶんお世話になったし、八月十一日にはニューヨークで貿易センタービルの辺りを歩いていたので、驚きが大きかったのだ。

けれどそれ以後の報道には、つくづくいやになることが多かった。なによりアメリカ大統領の発言には、聞き間違いではないかと、耳を疑うような乱暴なものが多い。ふり返れば、一昨年秋、フロリダ州での大統領選の開票が、ハイテク国家とは思えないような混乱ぶりを見せていたときに、民主党も早く敗北宣言を出して、混乱を収束させ、次回の選挙に賭けたら、という声が途中から聞かれるようになった。それを聞くたびに「それは違う、一度実現してしまったら、取り返しのつかないことをする政権もある」と危惧し続けていたのが、的中してしまった。といって、もちろんそんなことを喜ぶわけにはいかないけれども。

ニュースでは軍事専門家とかを招き、模型まで用意して「空爆の見通し」やら、「今後の作戦の展開の予想」など嬉々として（？）解説していた。それを見るたびに、何が起こっているのか考えているのだろうか、その下で生活が破壊され、人が傷ついたり死んだりしているのがわかっているのだろうかと、しみじみとアナウンサーの顔を眺めてしまい、次にはスイッチを切るということのくりかえしだった。

ときどき、ほんとに言葉がわからなくなった、と思う。たとえば「テロとの戦争」「貧困の撲滅」。戦争って、近代では、国家間で行われるものと思っていた。そして一応は宣戦布告をして行うものだと思っていた。アフガニスタンの空爆は、軍事行動には違いなかろうが、戦争ではない。

そもそも「テロ」というものが、戦争の相手になるのだろうか？　テロリズムとはなにか、といった議論はあちこちで繰り返されているが、厳密な定義ができているとは言えない。「テロを壊滅させるまで戦い抜く」と言うが、何を、どうしようというのだろう。ソマリアの送金システムを止めて、貧困に喘ぐ人々の生活基盤をおびやかすことは、その一環なのだろうか。

地域間に存在するあまりにひどい貧富の差をなくさないと、現在の体制やシステムへの異議申し立てはな

くならないだろう。「貧困」と「テロ」との悪循環を断つ手段が「撲滅」というのでは、集団暴行に走る中学生と同じではないか。

そして異議申立てそのものを、徹底的に封じるとなれば、意見の対立や違いというものを認めず、価値の一元化をするしかない。そしてこれを受け入れないものの生存権も否定する。全面破壊だけが、唯一の解決策ということになる。そしていま現在行われていることは、実際にはそれに近い。表立っては文化的価値の多様性を否定しないままに行われているから、少し見えにくいだけのことだ。

ちょうどクリスマスを挟んだ時期だったので、アメリカの友人たちからカードが送られてくる。それを見ながらあの人、この人の顔を思い浮かべる。その中には、ずいぶんはっきりものをいう人たちもいるし、ふだんはとても穏やかなのに、抗議行動となると、きっぱりやる人たちも大勢いるのに、現政権へのこの異常な支持率はなにごとかと思う。発言できないか、発言しても無視されるのだとしか思えない。日本も辿ったことのある道とは思うが、また繰り返してほしくはない。

ニューヨークで起こったことだけが「大悲劇」、とでもいいたげな「追悼」報道にも違和感がある。感度の悪い日本のメディアがちっとも鮮明に映し出してくれない、世界の日の当たらない地域のあちこちで起こっているさまざまな出来事を考えるとき、アメリカだけを被害者扱いしてほしくはないと思う。

そしてその戦争ともいえない破壊にさらされているアフガニスタンの映像が、またどうにもやりきれない。男ばかりの町角風景。「戦火に負けず遊んでいる子ども」とかも、男の子ばかりである。学校の風景も同じ。ときどき背景にうごめくのが、あの棒杭に布切れをかけたような、ブルカとかをかぶった顔のない女性たちである。青い色がきれいだとか言ってみるのも、ときにいささかの慰めになるかもしれないが、わたしには、ただ醜悪としか感じられない。これを文化といわれると、言葉を失う。それなら、纏足や、性器切除も文化であって、女性の人権弾圧ではないというのだろうか。

当初はタリバーンという神学生グループが撤退すれば、女性への抑圧がなくなる、というような話だったが、どうやらそんなまやさしいことではないらしい。問題は「極端な行き過ぎ」にあるのではない、という事実は認めたほうがよさそうだ。逸脱ではなく、根本の所に原因がある。コーランも聖書も仏典も性差別を容認している、という事実を真正面から見ないとだめなのではないだろうか。

一時さかんに繰り返された、「文明の衝突」論もさすがに下火になった。だいたいそんな衝突をするほど

の違いが、キリスト教とイスラム教のあいだにあるとは思えない。イスラム教それ自体はすばらしい、とかいうブッシュ大統領のモスクでの発言は、ある意味では、まったく当然のものだ。

しかし滅入ってばかりいても仕方がない。思い直して、いま私たちの会でできることはなんだろう、と考えてみる。宗教を内側から体験して、矛盾や問題を感じ、さらに例会や、会誌を通して情報交換を行って、中に入らないとわからない部分についての知識を得たものとして、何ができるだろうか？　私はそれを「普遍宗教」というイリュージョンから自由になること、と考える。なんとなく立派な、畏れ多いもので、手をつけてはいけないものとしての「普遍宗教」という幻想を、心の中で、焼き払ってしまうことである。

ともすれば批判の封じられた領域のことである。権威も組織の圧力もあるし、自分の選んだ道という義理を感じることもあるし、義理なんかではなく、生活がかかっている場合もあるから、容易ではない。また一律にどういう形でということも言えない。しかし内面から取り除くことはできるはずだ。

「普遍宗教」はどれも性差別を内包している、という事実を見つめること。それとどう向き合って生きるかは、個人の自由にまかされていると思うが。

わたしたちにできることは、神学や組織に頼らない霊性の涵養ではないだろうか。ニューエイジのグループからは、組織宗教は放っておいてもいずれ滅びるのだから、差別とか、言い立ててとんがることはない、という声もある。前半は賛成である。しかし、いまブルカを脱げない人たちがいて、読み書きもできない女の子達がいて、わたしたちがこういう会に集まっているということになると、やはり、ただ見ていればいいとは思えなくなる。キリスト教会で「大統領をテロから守る祈祷会」が行われ、イスラム社会では「アメリカに死を」という祈願が捧げられているとき、とらわれない霊性をさぐる試みくらいやって、少しでもいい波動を送り出したいと思う。

剣を打ちかえて鋤とし、槍を打ちかえて鎌とし…

斉藤　七子

九・一一の貿易センタービルへの連続テロに対してブッシュ大統領はすぐさま戦いを宣言し、世界各国への参加を呼びかけ、反対する者は正義の敵といわんばかりの態度であった。以下にわたしの感じた問題点を

列記したい。

＊テロにたいする報復戦争が正当防衛として国際法でも国内法でも認められていないにもかかわらず、また「力には力を」もって制する報復手段が、解決の手段として不適切なことがわかっているにもかかわらず、恐れを知らぬブッシュ大統領に引きずられて泥沼にはまりこむ主要国の首脳たちの無定見さにくらべ、小国ではみな反対した。

日本もまた一線をこえ米国と一体となって戦争に参加した。

＊「生兵法は大けがのもと」と言われるが、日本は先行きの見通しもなく海外派兵を認め、空中給油が準備され、航空母艦の話まで出てきた。安保会議や閣僚会議も開かれぬまま重要案件を何の議論もなしに強行した。待ってましたとばかりに憲法改悪まですすめている。単細胞小泉首相のタカ派ぶりが露見された。

「国際紛争を解決する手段として、武力を行使しない」という日本国憲法の理想主義を保守派の政治家や市民のなかには嘲笑する人がいる。

二十世紀は第一次世界大戦、第二次世界大戦と大規模な戦争がつづき、いくつもの内乱があり、いまも紛争が続いているというのに、日本は再び敗戦の愚を繰り返そうとしている。小泉首相率いる日本丸はいまや沈没寸前にある。

＊考えてみれば日本は開国以来今日まで、追随外交から脱したことがなかった。明治期は日英同盟によって英国に追随し、昭和初期は日独伊と三国同盟を結びナチスに、また戦後は敵国であった米国と安保条約を結んで隷従してきた。国民もまた「狼の威をかる狐」のように大きいものに追従し、ちからのあるものに隷従して、経済大国をほこった。このような人々の基層にある大国意識を変えることは至難に近い。これではアフガンの人々、アジアの人々、近隣諸国の人々との間に友好関係を結ぶことはできない。

国の基本は何によって依拠しているか考えるならば、敗戦の苦難を経験した日本は、当然、強者の論理でなく、弱者に目線をあわせて世界の平和に貢献する道を努めなければならないと思う。大国意識をほこるのではなく、目線をアフガンの人々に、アジアの人々に近隣諸国の人々に向けることによって、何故テロが起こったか、貧しい人々が何故虐げられているのか、いまの困難は何によってもたらされたか知らねばならないと思う。

かって私たちは第二次大戦で空爆の無差別殺人の恐ろしさを経験している。

空爆による無差別殺人の不正を世界に訴え、歯止めをかけることが出来るならば、世界への真の貢献になる。

「剣を打ちかえて鋤とし、槍を打ちかえて、鎌とし、国は国にむかってつるぎをあげず彼らはもはや戦いのことをまなばない」（イザヤ2の4）

これは昭和十六年一〇月三〇日、最後の交換船で帰国した米人教師から贈られた言葉だった。緑の美しいサイン帖の扉に書かれていて、折りにふれ読んで、心に刻んでほしいとあった。わたしはいま、この言葉を米国の人々に贈りたい。

Oさんへ　Ⅱ
他者の聖性を破壊することなく

申　英子

先日は京都へ出張中のお忙しいところ、大阪まで足を伸ばされ、わたしの牧会している小さなハニルチャーチの礼拝に出席してくださり、ありがとうございました。お蔭様で、借家の教会ですが、創立十周年記念を無事に迎えました。先回のWOMANSPIRITでこの十年間の報告をおおまかに手紙の形で書かせて戴いた後、Oさんが、今年になって小さな私たちの伝道所を訪ね、実際に日曜礼拝に参加、皆と交わってくださり、とても嬉しかったです。

そうでなくとも九・一一以後に一度お手紙を出そうと思っていたところでした。でも先日はゆっくりお話しができませんでしたので、また手紙を書かせて戴きます。

昨年二〇〇一年の九・一一は多くの人にとって忘れられない日になったでしょう。メディアの影響で数億人の人びとがバーチャルリアリティーの中で世界貿易センターのツインタワーが直撃され崩壊して行くのを目の当たりにしたのですから。わたしもその時間丁度テレビの前にいて、衝撃のあまりその後三時間は釘付けにならざるをえませんでした。

実際、あれから五カ月たち、当事者の周辺は別として、地球上の他の地域の人たちの生活はそんなに変ったようには見えません。しかし、見えないところ、こころの奥にはある大変なものが渦巻きはじめているのではないでしょうか。

その意味で、あれは「破壊」ではなく「分解」であるという言葉をどこかで見ましたが、当たっていると思います。今までの思考のパターンが分解してしまったのです。

わたしは生業が喋る仕事なので、九・一一については、もちろん、黙しておられず何度か語らずにはいら

れませんでした。今年で七年目を迎えたあの阪神・淡路大震災を境にして被災者をはじめ周辺の人びとの生活が変わったといわれています。九・一一も同様に、自分が他のあらゆる種類の人間と共にひとつの地球で生きているのだと自覚している人ならば、少なくともものの考え方、精神生活は、多少とも変わらざるを得なかったと思います。ただ、こう書いてみて、二十世紀末に起きたナチの大量虐殺、日本軍隊の残虐さに象徴される人間の加虐性を知った地球人は、その時点で思考回路を修正せねばならなかったのに、それができないままに二十一世紀を迎えたのだと改めて気づきました。

まず、想像のおよばない形の同時多発テロの犠牲になった数千人の人びとと彼女／彼らを愛する人たちの受けた衝撃と悲しみはいかばかりであったか。自分が当事者だったら、と他の人と同じく戦慄する思いで立ちすくみ冥福を祈りました。

それから、すこし、冷静になって、もう一度、犠牲になった人たちのことを考えたとき、ふと、わたしは彼女／彼らは「天使になった」と思えたのです。それが一番納得の行くことでした。たとえわたしの家族がそのように地上の生活を終えたとしても、そう思いたいと、考えは固まりました。

先回ご報告したとおり、副業として聖書を基に「生きることと愛すること」を高校三年生と共に考え授業をしていますので、もちろん事件のことや、「天使になった」と思うなどを授業で語りました。それを聴いた生徒の一人が手を挙げ「僕はそう思わない」と、勇気ある（すぐに手を挙げて反応を示すことは日本の学校ではめずらしい）反応に、わたしは「どうして？」と聞き返しました。「だって天使は存在しないから」と彼の応え。

そこでわたしは天使がいるという想像力ももてない生徒たちに、あまりにもファンタジックな言い方をしたのかな？、と一瞬反省しました。しかし、次の瞬間自然と「天使がいる、いないかの議論ではなく、数千人のひとが一瞬にしてこの地上から無残な姿で消えたことを、私たちはどう、理解したらいいのか、という私たちの問題なの」と反論していました。

愛する人が殺された悔しさから、やり返すという報復行動にでることを、果たして殺されて死んだ人びとは望むだろうか。むしろこのような理不尽なことが生きている者の間で、もう完全になくなるよう、いままでになく深く知恵を働かせ忍耐と思いやりで行動するよう、地上の人間を見守り励ましてくれる天使になったと思う方が亡くなった人びとが浮かばれるのではないか。今まで戦争だからという名目のもとで、どれだ

け多くの人たちが地球のあちこちで、無念の思いを抱いたまま殺されていったか。それがある地域では報道すらされないことも多い。片寄った一定の価値観の故に命が軽く扱われ消された人びとがいた。実際これらのこととの関連の中で今回のテロも起きたのなら、なおさらのこと。天使の強力な助けが必要だ。まだまだ報復劇が継続しているのだから。

この時点でわたしはまだ、ゆかりのある三〇代の青年の死を知りませんでした。二〇年ほど前に、わたしは幼い子供一人を連れて、まだ十代だった彼の実家で一晩泊めてもらったことがあったのです。大学を優秀な成績で卒業し、エリート社員となった彼は米国勤務のさなか、今回のテロの犠牲になり、妻と二人の子供を置いて他界したのです。いつ会っても明るく愛くるしい笑顔で話すわたしと同年の彼の母親は、心労のあまり今は寝込んでいるとのこと。事件から一カ月程して、はじめて、このことを知ったわたしは、ＪＨと言う名の彼がやはり天使になった、同じく他の数千人もそうだと確信しました。

テロリストたちをどう理解するかがもうひとつの大きな課題でした。お送りくださったＤ・ヒロ著でＯさんが翻訳された「イスラム原理主義」を読みましたが、正直いって難しかったです。ただ、この地上をより良くしようと政教分離に反対し、ムスリムの世を実現させるため命を捧げてまで戦う若者は今後も存続するであろう事はわかりました。彼らもまた政治と宗教の犠牲者です。京都在住のある人がテロリストたちに目を覚まし、家に帰るよう呼びかけの手紙をメール上で発表していました。

九月末、日本基督教団天満教会でもたれた兵庫、京都、大阪の三教区合同の「九・一一の追悼と平和のための集会」で事件当時、ニューヨークに滞在していた森孝一同志社大学神学部教授が講演し、結論の部分で「今度の事件は宣教や神学の課題として多くの問題を提示しました。白人、男性神学の行きづまりであり、同化とはめ込みの神学ではもう成り立たない」という趣旨のことを言われました。また原理主義の克服は、「枠組みで他者を理解しようとする傾向」を変える中にあり、原理主義の共通点は「簡単な答えを求める」「こちらは答えを知っている」「特定の文書の中に答えはある」ということだと言われました。わたしは現代の日本の神学部教授がこの事件から、以上のような分析を引き出したことは、意外であったと思う反面、とうとう、そしてやっとこの結論を出すに至ったのかと、あらためて九・一一の事件のインパクトの深さを再認識しました。しかし、同時にまさにこれはキリス

ト教内部で、今までの西洋の男性中心主義のキリスト教を批判していた者なら、すでに三〇年以上も前から違った形であれ主張していたことではないか。あるいはニーチェをして「神は死んだ」と言わしめ、「神の死」の神学の台頭などを含め、このような神はすでに死んだものと言わざる得なかったことと一脈も二脈もつうじる話ではないでしょうか。

マイケル・ラーナーというサンフランシスコのラビは事件後に書いたEメールに「私たちは自らに問わなければならない『私たちが生活し、社会を秩序立て、互いに接している日々のやり方の、いったい何が原因となって、これほど多くの人びとが暴力を肯定してしまうのか？』」「私たちは、一つの世界に住んでいるのだ。相互依存はますます深まっている。憤り、怒り、絶望を人々に与えている様々な力は、最終的には、他人事ではなく、自分たち自身の日常生活に襲いかかってくる。もしも私たちが、他者の聖性を破壊し、他者を自分の目的の手段として利用し、苦しんでいる人々の痛みに無感覚になることを習いおぼえてしまう時が来るなら、かくも恐ろしい暴力行為など日常事となるような世界を、結局は私たちが作ることになるだろう」と書きました。

これを回したおかげでシナゴーグは多くの献金を失ったといいます。今の社会は「他者の聖性を破壊するな」と本気で言い出すとバッシングを受け、時に身の危険を感じさせられるのです。あらゆる状況で同じことが言えます。わたしが生まれ育ち住んでいる日本社会では、たとえキリスト教界でも、「自分の味方かそうでないか」が規範になっていて、どんなにまっとうな意見を言っても自分たちの陣営を批判することになるとそれは「敵」なのです。まして、そのような集団では自浄作用はとうに失なわれています。自浄作用の喪失はまさしく自他の聖性を認められなくなったことにほかならないのではありませんか。

そして「フェミニズム・宗教・平和の会」はまさしくこのことを言って来たのではないでしょうか。どんな思想も宗教も地球上のどの人間の聖性をも破壊するべきではないのです。だれかひとりの聖性（神性）が壊されているのなら地球に平和はないのです。九・一一以降に今のブッシュ政権の支持率が時々発表されていますが、はじめと同じく相変わらず今も八〇％以上を占めています。しかし、これを反対に見ると二〇％近くの人びとが違った意見を持っているということではないでしょうか。大変な数です。日本の政治状況からも同じことが言えるでしょう。この世を分かち合いの世界にしようとする創造的な人びとが一～二％存在していて、その人たちが真剣に取り組むと、人間は住ん

でいる環境を変えることができると言いますし、わたしもそう信じている一人です。ならば恐怖にかられ疑心暗鬼になって、やたら否定的なことを言う必要はないでしょう。

また他者の聖性を認めることができるのは、自分の聖性を心から認めている者だけができることではないでしょうか。キリストのことば「自分を愛するように隣人を愛せ」は、自分をどれだけ受容（愛して）いるかを問うています。この時代だからこそ、この意味を深く追求すべきでしょう。それは、なにをしても無意味だとシニシズムに陥るか、一％の可能性にかけて今日生き、命を尊ぶか、が問われていることにつながるからです。

また少し長い手紙になりました。私たちの小さな伝道所では、わたしを含めて、生まれて来てこのかた、コントロールゲームに痛めつけられて疲れた人が集っています。ほんとうの癒しは、「誰もあなたを裁かない」と分かったときからはじまるようです。古い思考は怖れを育てます。新しい思考は愛を育てます。国家という大きな集団、家族という小さな集団、そして一人ひとりのこころの中におきることは結局同じではないかと思うのです。長い間、個人の問題と集団の問題でジレンマに陥って悶々として来ましたが（今も時々そうなりますが）、すべてはわたしの中でおきて原因と結果を産んでいると分かりかけて来たとき、体が軽くなりました。「真理はあなたがたを自由にする」と言います。十代後半に「真理とは何か？」と問いはじめ、今も問うていて、真理はこれだと大声で言い切れていませんが（大声で言うものではないですネ）、少なくともわたしが、できるだけこころが納得する形で進む時、裁く存在は誰もいないということだけは確かだと思っています。

私たちは毎日の生の現場で、自分に襲いかかる恐怖、不安、いらだち、究極的には肉体的であれ精神的なものであれ、自分の死につながるものにぶつかったとき、九・一一を思い出すようにしたいと思うのです。なぜなら、その危機的な時こそ、古い思考のおもむくままに行動するのか、冒険的とも思えることかも知れないが、新しい思考に生きていくのかが問われているからです。自分の中にあるファシズム、何げない会話の中でも見つかる家庭の中にあるテロ、属している組織において日常的に繰り返されている命（愛）をつぶす出来事から逃げていないか。また自分以外の他者が精神的にも肉体的にも殺されても、投げやりになって心の目をつぶっていたら、あの事件を風化させ、直面することから避けているのではないでしょうか。冒険は遠いところでするのではなく、身近なところで生を

現場として挑戦するものでしょう。

ケルケゴールの言葉に

「冒険することによって、あなたは自分の足場をしばらく失う。

冒険をしないことによって、あなたは自分の人生を失う」

九・一一は私たちに真に生きることを促した事件であったと思います。

迎春と言いたいところですが、もう少し寒い日が続くそうですのでくれぐれもご自愛くださいませ。

二〇〇二年二月十二日

旧暦の元旦に

申　英子（シンヨンジャ）

ブッシュ大統領への手紙

岩田　澄江

次の書簡は、ビルマ市民フォーラムの運営委員としての私が、昨年九月に依頼されて書き、集まった77名の署名とともに市民フォーラムが、10月5日にブッシュ大統領に送ったものです。

米国大統領

ジョージ・W・ブッシュ　殿

２００１年10月5日

去る9月11日に突然米国を襲った史上未曾有のテロ行為に対して、ビルマ市民フォーラム（ＰＦＢ）に集う私たちはやり場のない憤りを感じるとともに、６千人を超え、80カ国近くにもなるという被害者の方々に突如おとずれた無念の死にたいして、深い哀悼の意を表わします。

今回の事件は、現代の世界がおかれている構造的な歪みから生じたものであることは理解できても、その歪みを指摘する手段としてとられた行為は、許し難く

非情なものでした。暴力に対するに暴力をもってなされる報復は、究極的には解決にならないばかりでなく、さらなる暴力を生み出すだけです。もし今回の襲撃が湾岸戦争への報復であるとしたら、それに対する米国側の報復が、より一層大きな暴力によって行われてよいのでしょうか。

そのような悲劇的事態を、被害者である方々が望んでいるとは到底考えられません。

ＰＦＢは、軍政の抑圧下にあるビルマの民主化のために活動を行っている団体です。このテロ事件に際して、会員である在日ビルマ人の中に「私たちは自国内において絶えざるテロを経験しているのだ」という声がありました。言論のような平和的手段によらずに、脅しなどの恐怖を呼び起こす暴力的手段によって、自分たちの意思を通そうとする行為をテロと呼ぶならば、現在ビルマ国民を苦しめているのはそのような行為です。その軍事政権に対して１９８８年以来、平和的手段で抗し続けているのがアウンサンスーチー氏をはじめとする民主勢力です。

私たちはこの機にあたって、暴力に対する闘いは暴力によるものであってはならないことを、あらためて銘記するものです。ビルマの民主勢力の闘いはすでに13年を経過し、いまだに確たる希望は見えていません。しかし、歴史の歯車は確かにまわっており、平和と民主化を待ち望む人々が勝利を得る日は確実に訪れることでしょう。その日のために、私たちはこれからも力を尽くしていく決意で臨んでいます。

多くの死傷者を出した米国が、憤りに駆られて更なる暴力に訴え、より多くの死傷者を再び生み出すことになる政策をとることなく、国連および各国の叡智を結集した平和的手段によって、この問題の解決を目指す事を、衷心より願うものです。

ビルマ市民フォーラム

政治的無視が引き起こすこと

平野　裕子

そのニュースが日本のメディアに飛び込んできたのは、二〇〇一年九月十一日、夜十時過ぎのことだった。その時、何が起こったのか。すぐに、その後の展開と背景を予測できた人はいなかったのではないだろうか。

米国は九月十一日以後、イスラム原理主義集団アル

カイダのリーダー、ビン・ラディン氏を犯人だとする証拠を提出することなく、ビン・ラディン氏がいると予測されるアフガニスタンへの報復攻撃を開始した。空爆は、開始から四ヶ月過ぎたきょうも、アフガニスタンの空で続いている。

なぜ犯人は、あの自爆同時多発テロを計画し、実行したのだろうか。

犯人は、一九七九年東西冷戦時代の米国とその同盟国によって編成された、対ソ連への戦闘的な傭兵軍隊にルーツのある分派だと推測されている。傭兵軍隊には「見つけられる限りの最も戦闘的な」（『九・十一　アメリカに報復する資格はない！』ノーム・チョムスキー著、山崎淳訳、文藝春秋・九三頁）人を集めたのだが、「それがたまたま過激なイスラム教徒で、イスラム原理主義者とわれわれが呼ぶ人々だった。ビン・ラディンがそうであるように、多くは『アフガニス』と呼ばれる、アフガニスタンとは別な国の出身者」（上の資料に同じ・以下＊印で表す・九三頁）だった。

米国を主導とする「先進文明国」の下で組織、利用され、やがて、不要なものから邪魔な存在へ、さらには米国の敵へと転じさせられた傭兵『アフガニス』の屈辱。一方、自分の国に勝手に押し入られ、身近な者を殺され、傷つけられていくのを目の当たりにし、戦場と化した自分の国から出て行かざるを得ない人々、また、出て行きたくても貧しくて難民にもなれず自国に留まっているアフガニスタンの人々のやり場のない深い悲しみと怒り。誇り高ければ、高いほど、傷つけられたその誇り高さを、同じだけの強烈な復讐心へと転じさせる人がいても驚くに当たらない。冷戦下で組織された傭兵軍隊「アフガニス」に、彼らの誇り高さをルサンチマンの化身『アルカイダ』や『タリバン』へと変転させる処遇をしたのは米国ではなかったか。つまり、『アフガニス』は、米国によってレイプされたのではないか。「レイプの本質は個人を身体的、心理的、社会的に犯すことである。レイピストの目的は被害者を奇襲し、支配し、屈従させること、彼女を全く孤立無援状態にしてしまうことである。」（『心的外傷と回復』ジュディス・L・ハーマン著、みすず書房、八五頁）それを自覚したアフガニスは、米国そのものの象徴へ報復を計画、実行したのではなかったか。

米国は、なぜテロ組織が存在するのか、という「原因を理解し、それに手当てをする真剣な努力」（＊・三七頁）に転じることなのではないだろうか。

中東、とくにイスラム圏の人々の生活、文化について、それらを支えている精神的支柱のことを、私たちはどれだけ知っているというのだろうか。たとえば、日本では、自分より他の人を優先させるのが分別ある

大人としての価値観であったり、また人前では「自分は、自分は」と声高に喋ることを好としない美学がある。これらのことを身に付けた人が欧米で生活することになったら誤解や、問題を招く確率が日本で生活しているより、ずっとずっと高くなるだろう。

まず、誤解や問題が生じる前に、あるいは生じた後にでも、相手に通じる言語で、相手が理解できるように、双方間にある違いを説明しなければならない。説明したとしても、それで相手は納得してくれたり、理解を示してくれたりするとは限らない。自分の文化や考え方が唯一と思い込んでいる相手にとっては、信じられない事で、煩わしく、自分の生活基盤を乱される邪魔な存在という受け止め方をされるかもしれない。さらに相手が、自分の文化や考え方の方が、日本のものより優れているという思い込みのもとでなら、露骨に嫌悪感を示すかもしれない。自らの力で獲得したのではない、生まれたときからの既得権を持った生活が当たり前の人々には、既得権のない人々の生活や心理的側面を、想像力を駆使し理解へと近づけるのは、時間とエネルギーのいる作業だ。

日本は、明治以来自ら進んで、欧米に学んできた。欧米のことは、欧米の人が日本のことを知る以上に知っている。逆に欧米が、実際の日本について、注目し始めたり学び出したのは、ここ三十年くらいのことだ。一方、イスラム圏については、ほとんどステレオ・タイプのイメージが先行しているだけに思える。欧米でもイスラス圏の人々についての情報は、ステレオ・タイプや偏見、思い込みで受け止められていることが多そうだということが、ブッシュ大統領の演説などからも想像できる。まるで、イスラム側に「監禁状態」が仕掛けられているかのように、実態を知るための情報が流されて来ていない。

だから、映画『カンダハール』を観に行った。イランの監督モフセン・マフマルバフがアフガニスタンの国境近く、イランのザーボル近郊で撮影したものだ。私たちが、アフガニスタンのことを知り得ない状況が、この映画を観て解かった。誰もアフガニスタンのことを伝える人もいなければ、伝えるための通信手段がなかったのだ。二十年に及ぶソ連の軍事侵攻と内戦で、国土は荒れ果て、人々は身も心も傷つき果てていた。緒方貞子氏の伝える「国際社会から見捨てられた国」の実態がそこにあった。それを映画にして伝えたのは、アフガニスタンの人ではなかった。もはや、アフガニスタンの人々には、そんな力は残っていないことも、伝わってくる。「見捨てられること」、「無視されること」、「孤立無援にされること」が、どんなことに繋がっていくのか。その一つの結果が、九・十一に突然飛び込んできたニュースに集約されていることも、『カン

ダハール』で初めて解かった。

『カンダハール』のモフセン・マフマルバフ監督はこんなことばを残していた。「空から爆弾ではなく、教科書を撒いていたらアフガニスタンは、こんなにはなってはいなかったでしょう。地には地雷ではなく、麦を蒔いていたらアフガニスタンは、これほどにはなってはいなかったでしょう。」

黙想――メディアからの情報

牧　律

私達が日ごろ日本で手に入れることのできる情報は、多かれ少なかれ常にどちらかといえば自国の世界的立場を反映する情報であることは間違いの無い事実であろう。

戦後敗戦国となって以来、常にアメリカと密接な関係を持ち、北朝鮮の共産主義に対して脅威を感じながらもアメリカの核の傘の下でアジア地域の安全保障を守るという形で動いてきた日本は、長年の間にアメリカと切っても切れない関係を作り上げてきたといえる。

その中で暮らす私達日本人は、アメリカ覇権主義の恩恵をうけるあまり、世界情勢に対しなかなかニュートラルな視点を持つことが難しいといえる。

昨年九月一一日のテロ事件についても、日本人の多くは「被害者であるアメリカ人遺族の痛み」は分かち合えるような気がするが、「ビンラディンやそれを支持するイスラム社会と人々」については彼らが何を考えてあのような行動を起こすのかよくわからないという気持ちをもってはいなかったであろうか。

よほどのイスラム通でない限り、今の日本ではイスラム社会について正しい知識をもつ事は難しいし、彼らの生の生活がメディアに流れることは稀である。日本のメディアから流れてくるのは、イスラム教の教えを文字通り社会規範としていく、極めてラディカルなイスラム原理主義者達の行動が殆どであって、よくよく考えればイスラム社会にも穏健派やテロによる報復反対を唱える人々が大勢いることをあまり見せてはくれない。

しかし九月一一日のテロ事件に対し、アメリカが取ったビンラディンの捕獲追跡とテロに対する報復爆撃への選択は、一見彼らはテロを起こした悪の権化を潰そうとしているように見えるが実はそうではなく、彼らが熱心に叩いているのは悪の権化とは全く関係の

無い弱者である子供、老人、女性、そして罪の無い一般の人々であるという事を、さすがの我々も理解し始めているのではなかろうか。

そしていきなり空からミサイルが降ってくるという恐怖と苦痛を体験する事は、ワールドトレードセンタービルの爆破で散っていった多くの人々が味わった地獄と同じであるという事を理解するべきであろう。そのような事を思い描くとき、いくらブッシュが気勢をあげて吼えても私達の心は益々冷え冷えとしてくるだけである。

兵戈無用（ひょうがむよう）、兵隊も武器もいらない！

― テロにも報復にも反対！ ―

藤谷不三枝（蓮月）

昨年九月一一日に起こった同時多発テロ事件は、多くの人命を奪い、建物を破壊するだけでなく、人が他者に対して抱く最低限の信頼までも、ことごとく壊してしまう出来事だった。自爆テロなどということが、どうしたらいったい起こり得るのか…。日本にも、「神風特攻隊」なるものが、敵陣に突っ込んでいったわけだが、それはまだ自分一人だった。今回のテロは、無関係の飛行機を乗っ取って、同乗者の運命を共にさせるわけで、もっとむごいものであり、断じて許される行為ではない。「原発テロ」も、まさか…ではなくなってくるかもしれない。

ただ、だからといって、「報復はやむを得ない」とか、ましてや「正義の戦い」などと言えるものでないのもまた明らかなのに、世界の今の情況は一体どうしたことだろうか…。米国では、アフガニスタンへの武力攻撃を始めたブッシュ大統領を、八割以上の国民が支持し、米軍によるアフガニスタン攻撃に心を痛めた高校二年の女生徒が、校内で反戦クラブを組織しようとして、停学処分を受けたというし、英国は「大英帝国」ぶりをあらわにして積極的に支持、日本はまるでブッシュ政権のカバン持ちの如く、報復攻撃に加担した。そしてその後のアフガン復興会議からのＮＧＯ排除事件は、日本の「村八分」的体質を露呈して、後味の悪さを増大させた。

「アフガニスタンの抑圧された人びとは、アメリカとわが同盟国の寛大さを知るであろう」と、食料投下の意義を語るブッシュ米大統領の、その傲慢さ！　朝日新聞の「かたえくぼ」には、「断食月も攻撃―食料投下だけ中止します―米国政府」と、ブラックユーモ

アで痛烈に皮肉られていたのには、感心してちゃあいけないのだろうが、思わずうーんとうなってしまった。

ところで、昨年三月一九日付けの朝日新聞に、eメール時評「アフガン女性の人権問題」と題し、エチエンヌ・バラールというジャーナリストの文章が載せられていた。そこには、アフガニスタンを支配する原理主義勢力タリバーンが、偶像崇拝を許さないイスラム教の教理に基づくとの理由で、バーミヤンの石仏を含む仏教遺跡を破壊してしまった件について書かれてあり、それはなるほどと思うものであった。彼によると、四年あまりのタリバーンの支配の下で、九百万人のアフガニスタン女性が、就労・通学が禁止されたという。頭から全身を覆うブルカの着用に応じない女性はその場で折檻され、指先にマニキュアを塗れば指ごと切断される。自転車やバイクにも乗れない。タクシーに乗るにも父親、または夫や兄弟の同伴が絶対条件で、自宅のバルコニーに姿を出すのも禁じられている。明らかな人権侵害だというのに、国際社会は今まで十分な関心を払ってこなかったようで、もっと国際社会がタリバーンに対して強い態度で臨んでいたら、遺跡破壊も避けられたのではないだろうか…と述べているのだ。

たしかに、国際女性会議などの場で女性差別の現実を課題にしながら、ブルカの着用うんぬんでは、いつもイスラム女性と他国の女性たちの間でかみ合わないものがあるのは私も知っている。男たちならなおさらのことで、結局は、「その国の宗教文化なのだから」「本人たちが不満を訴えていないのだから」それでいいだろう、というところに落ち着いてしまっていたのではないだろうか。

振り返って今、私たちが何をしなければならないのか、ならなかったのかを考えてみると、テロにも報復にも加担せず、反対し、「正義と悪」などという二極思考に陥らないこと、宗教という名に惑わされず、実態そのものを見ること、そしてテロを誘発する要因である「大国による他国の支配」の歴史を深く知り、認識することの重要性が思われてならない。もちろん、現実的には地雷の撤去も急がれるし、医療・物資の支援も難民の受け入れもなされなくてはならない。また、アフガニスタンだけで済む問題でもない。次はイラクかアフリカの国が標的になるかもしれないのだ。

やることも考えることもいっぱいある。抱えきれないくらいに。それでも、できることからやっていこうーと希望を捨てないのが、私流だ。

言説は無効か

奥田　暁子

アフガン復興会議の終了とともにアフガニスタンに関する報道は急減した。最近では、アフガニスタンの人びとがタリバンの支配から解放され、平和な暮らしを取り戻したことを喜んでいるという作為的な報道のみが流され、アメリカの報復攻撃が正当であったことを印象づけようとしている。しかし、わたしたちは決して忘れないだろう。九・一一以後アメリカが世界の最貧国であるアフガニスタンに対してやったこと、そしてその無法な行動をイギリスや日本を含む世界の大国が支援したことを。

一〇月七日に始まった報復攻撃で、アメリカは人口二二〇〇万人の三分の一以上に当たる七五〇万人が飢えに苦しみ、餓死寸前の子どもたちが大勢いるアフガニスタンに、海上から巡航ミサイルを何百基も発射し、空からはバンカーバスター、デイジーカッター（一発で野球場五つ分に相当する地域の人と物を殲滅する威力がある）、クラスター爆弾を大量に投下して、大勢の市民を殺傷し、難民をさらに増やし、すでに荒廃している国を破壊し尽くしたのだ。

これらの暴力的な攻撃は、テロに対する当然の報復として認められるというのがアメリカの論理であるが、アメリカが言う「テロ」の定義は偽善的である。アメリカはこれまで他国に対して、規模から言えばもっとすさまじい暴力行為を行ってきたのだが、それをテロとは呼んでこなかったからである。

一九八二年にはアメリカの援助を得たイスラエル軍がレバノンに侵攻し、ＰＬＯ掃討を名目に、米国製兵器でレバノンとパレスチナの一般市民一万八千人を殺戮した。その後もレバノン侵攻は何度も繰り返され、そのたびに多くの一般市民が犠牲になった。一九八〇年代にニカラグアでは、アメリカの爆撃によって数万人の市民が殺された。この暴力行為を止めさせようとニカラグアは国際司法裁判所に提訴した。それを受けて、国際司法裁判所がアメリカに有罪の判決を下したにもかかわらず、アメリカはこれを無視した。

一九九〇年代にはアメリカはトルコに対し、クルド人の反乱を鎮圧するために兵器の八〇％を供給して、トルコ政府が数万人を殺し、数千カ所の村を破壊する手助けをした。湾岸戦争ではイラクで一〇〇万人の非戦闘員と五〇万人の子どもの死を招く主たる要因をつくり出した（劣化ウラン弾の被爆で、今も子どもたちは白血病や癌などに苦しんでいる）。一九九八年にはスーダンでアル・シーファ薬品工場を爆撃によって破

壊し、スーダンの薬品備蓄の半分と生産施設を破壊し、その結果として治療可能な病気によって今もなお多くの子どもたちを死亡させ続けている。

パレスチナでは今も毎日、女性や子ども、老人など一般市民が圧倒的軍事力を誇るイスラエルの攻撃にさらされている。国連決議を無視して侵略してくるイスラエルに対し、職業や外出の自由を奪われ、家を破壊されたパレスチナ人が、止むに止まれず立ち上がった行動、インティファーダ（民衆蜂起）をも、シャロンはすべて「テロ」と断定し、戦車で反撃する暴挙に出ている。この無法なイスラエルの行動を見逃すだけでなく、むしろ支援しているのはアメリカである。

その他、コロンビアでも東ティモールでもアメリカは同様の役割を演じてきた。これらの事実を指してノーム・チョムスキーはアメリカ国家を「テロの親玉」と呼んだが（『9・11―アメリカに報復する資格はない』文芸春秋社）、このすべてはアメリカにとっては「テロ」ではなく「善」なる行為であり、「正義」に適った「公正な」行動なのである。結局のところ、アメリカの言うテロとは、反米活動のことなのだ。

「テロ」の定義が恣意的であるだけでなく、今回の報復攻撃を正当化するために、ブッシュが頻発した「自由」や「正義」という言葉もダブル・スタンダードとして使われていることは今や明らかである。

「世界の自由を愛する国々はわれわれの味方である。これは善と悪との歴史的な闘争となろう。しかし善が圧倒するだろう。」

「この戦いはいまだ経験したことのないものだ。しかし、結果は明らかだ。自由と恐怖、正義と残酷が戦っているのだ。神がわれわれに英知を与え、合衆国を見守ってくれんことを。」

辺見庸は九・一一以後の事態を指して「言説の無効がこれほどはっきりと判定されたことはない」と言ったが（『単独発言』角川書店）、過去にアメリカが行ってきたことを知れば、ブッシュの言う「自由」や「正義」という言葉もそらぞらしく響く。すべてはアメリカにとっての「自由」や「正義」であって、普遍的な価値を持たないことは明白であろう。「神」さえも、イエスが説いた最も弱い人びとを愛する神ではなく、アメリカの富と力を守ってくれる存在を指しているのだ。

悲しいのは、自国の利益だけを追い求め、国際法に違反する行動を平気で行っている国が世界のリーダーとして国際政治を牛耳っていることであり、それにもかかわらず、どの国もアメリカの行動を批判できないことである。それは経済がグローバル化した今日、アメリカを敵に回せば、自国の経済が立ち行かないことを、どの国の指導者も知っているからであろう。それと同時に、国内に反政府活動の火種を抱えている国で

は、国家権力を守ることが至上命題であり、その点ではブッシュの論理は自分たちにとって都合がいいからだ。

このような強者の論理がものを言う不公正な状況は当分続くのだろうか。そして、アフガニスタンやパレスチナのような貧しい国に生まれた人びとは、いつまでこの不条理を黙って受け入れなければならないのだろうか。

九・一一以後の各国の動きを見ている限り、もはや各国の指導者たちも国連などの国際機関も現状を変えることはできないように思われる。そうであれば、この不公正な状況を変えるために残されている道は、国家を超えて市民がつながることしかないように思われる。力のバランスから言えば、圧倒的な国家権力の前に個々の市民はまったく無力である。しかし、どこの国にもアメリカ中心の国際政治に批判的な人びとがいる。八割がブッシュを支持していると言われる（この数字もどこまで信用していいのか分からない。世論調査が人口比に応じてマイノリティの人びとも含めているのかどうかは報告されていない）アメリカでも、二割は反対派である。マスメディアはそれらの声を伝えないが、インターネットを通して傲慢なアメリカ単独主義を批判するさまざまな声があることを知ることができる。たとえば、イスラマバードから発信された「オバハンからの緊急レポート」には一〇万を越すアクセスがあったようだ。これはパキスタンで二〇年間生活し、登山者向けの観光業「日パ旅行社」を経営している督永忠子さんがつくったホームページであって、マスメディアにはまったく載らない情報や、大国の傲慢さがアフガニスタンやパキスタンの人びとにどう受けとめられているかなどが率直な言葉で書かれていた。最近ではヨーロッパで、ブッシュの「悪の枢軸」宣言に反対する動きも出てきている。そういう人びとの声が集まってネットワークをつくりだすことができれば、「言説の無効」という絶望的な情況に小さな穴を開けることができるかもしれない。

混　沌

千葉　悦子

九・一一を思うたびに、まとまりのつかない思いが堂々巡りをするばかりだ。

九・一一以前、西側諸国はアフガニスタンを気にとめずにきた。九・一一以降、我々のもとにいきなり大量のアフガン情報が入るようになった。そして出来事

の根本には大国アメリカのエゴがあるということがわかった。だけどこういう学習って、テロリスト達の思う壺だよね。

九・一一以降、イスラム諸国にあるアメリカ憎悪をつくづくと感じた。片や、敗戦の色濃かった日本に二度も原爆を落としたアメリカへの憎しみを日本人は易々と忘れた。そして今や、文化も政治もアメリカの植民地かと見まがうばかり。日本は多神教だし、確固たるアイデンティティなんてないからなぁ。〝憎しみ〟も〝苦悩〟も持ち続けることができないらしい。

だけどこんなプライドのない国々ばかりだったら戦争もなくなるのかな。

こんなしょうもない自問自答を繰り返すだけ。九・一一をどう見るかの結論は私には出せない。また、簡単に結論の出せる問題であるはずもない。

話題映画『カンダハール』を今日観て来た。

爆撃や地雷で手足をなくした人々が砂漠の救護テントに集まっている。そこに赤十字のヘリコプターから義足が落とされてくる。そのわずかの義足めがけて群がり走る松葉杖の人々。あのシーンを見れば、誰だって胸がしめつけられる。そして私は思った。ああ、あの中の一人の人にでいい。義足を送んなきゃ！　って。

九・一一への混沌とした思いの中で、それだけが今の私にあるたった一つのリアリティ。

二〇〇一・九・一一、私の願いとして

渡辺　秀子

二〇〇一年九月一一日。アメリカの同時多発テロ事件。

あの瞬間からアメリカは世界のすべての人びとの頂点にたったようだ。圧倒的な経済力はそれだけで権力である。アメリカさえよければ他の国々はどうなってもよいと好戦的なブッシュ大統領の勢いは増す一方である。

イラン、イラク、北朝鮮を『悪の枢軸』と名指しする大統領が世界のリーダーといえるだろうか。

それにしてもテロ。それに対するアメリカの報復攻撃がなぜ阻止できなかったのだろうか。アメリカを国際的な機関で批判し、止めさせられなかったのはなぜだろうか。テロリスト撲滅を「正義」としての報復攻撃が始まったあの時、タリバンへの空爆、地上軍導入の戦争を伝える連日の日本のニュースは、ほとんどアメリカ軍寄りであった。そこには、アフガニスタンの普通の人びとがその中で生死の危険を受け逃げまどい、命を落したであろうニュースは報道されなかった。

テロは許されない。が、報復攻撃も許されない。戦

争はこのにテロ事件になんの解決をもたらしただろうか。そして今、アフガニスタンの人々はどうなったのだろうか。23年もの長い間、戦場だったと知った。はたして、平和を取り戻すことはできるのだろうか。わたしには想像することもできない。

世界中から、洪水のような情報量のなかに居て、戦争さえ見逃しているのだとおもう。こんなふうにして、ある日、いきなり、戦争は日常のなかへ忍び込んでくるのだろうか、と漠然とした不安にかられる。すごく恐ろしい。だから言いたい。「21世紀の世界はもう戦争は絶対してはならない」と。

これ以上、地球の全てのものを傷付けることをやめなければならない。地球環境、飢餓、貧困と解決をいそがなければならない大きな問題をあの『世界がもし一〇〇人の村だったら』に答えを探したいとおもう。

わたしは、アメリカ一国主義に嫌悪感を持たざるをえない。アメリカは傲慢さではなく、世界一豊かな国としての責任を果たさなければならないとおもう。

アメリカ「帝国」はいずこへ

近藤　和子

はじめに

みなさんは、「9・11テロ」、正確には、二〇〇一年九月一一日にニューヨークの世界貿易センター、ワシントンの国防総省、そしてピッツバーグ近郊で墜落した(米軍によって撃墜されたという説が消えてないが)飛行機によって起きた一連の「同時多発テロ」と称される事件についてどのような感想を持たれたであろうか。

私自身は当日テレビで知ってびっくりしたが、同時に、米国の軍事行動によって世界各地で多くの人びとがこれと同じような恐怖を味わい、また死んでいったのだ、と感じ入った。アメリカの人びとはその軍事行動によって世界の人びとがいかに苦しんでいるかがわかるだろうか。三〇年前には、チリのアジェンデ政権がアメリカCIAの仕掛けた軍事クーデターで倒されたばかりでなく、多くの人びとが虐殺された。

そして強調しなければならないのは、今日も、パレスチナの人びとがイスラエル軍の攻撃によって命を奪

われている、ということだ。このままの状況が続けば、パレスチナの人びとはイスラエルによって、地上から抹殺されるか、これは悪夢のようだが、かの「ホロコースト」を想起させるのだが、あるいは永遠に彼らの軍事支配下に置かれるであろうか。あたかも「9・11テロ」の真の原因が中東問題、パレスチナ問題にあるという多くの人びとの指摘を悲劇的なことだが、裏づける事態になっている。

「戦争と革命の世紀」といわれた二〇世紀が終わり、平和の世紀をと、多くの人が希望した二一世紀は皮肉なことに、「テロと戦争」で始まったのだ。

「悪の枢軸」発言

その後の状況は、ご存じのように、ブッシュの「宣戦布告」で、アフガニスタン空爆が始まり、アメリカが「テロ」の「犯人」とするオサマ・ビン・ラディンとそのテロネットワーク「アル・カイダ」、そして彼らを匿ったとするタリバン政権に対する空爆が始まった。「国際テロネットワーク」を撲滅するとされる空爆は、日本の自衛隊の後方支援を受けながら、現在も続いており、空爆による死者はすでに世界貿易センターの死者を超えている。オサマ・ビン・ラディン捕獲作戦はどうなったのか。アフガニスタン空爆を続けながら、ブッシュ米大統領は、二〇〇二年の一般教書で、今年は戦争の年になる、と宣言し、イラク、イラン、北朝鮮を「悪の枢軸」と呼び、「宣戦布告」をした。

この「悪の枢軸」発言は、もちろん、第二次世界大戦の、ドイツ、イタリア、日本の「枢軸」を念頭に置いたものだが、当事者を始め、ヨーロッパからも多くの反発を引き起こしている。なお、「9・11」を多くのアメリカ人は「パールハーバー」になぞらえた。「悪の枢軸」発言と重ね合わせると、彼らはその対「テロ」戦争を第二次世界大戦のような世界大の戦争にしたいように思える。本当だとしたら恐ろしい。

「悪の枢軸」発言に対する世界的な反発のなか、二月、日本、韓国、中国を訪れた。そして韓国では、発言に対する激しい反発を浴び、レーガン元大統領の「悪の帝国」発言に言及して、北朝鮮を侵略するつもりはない、と言わざるを得なかった。

しかしながら、米軍は反「テロ」行動の一環としてフィリピンの「アブサヤフ」掃討軍事作戦を現在行っており、沖縄の特殊部隊がその中心である。

「帝国」アメリカ

アメリカは「テロ」を撲滅するという名目で、世界に戦争を仕掛け、仕掛けつつある。世界的な言語学者

であり、反戦活動家としても有名なノーム・チョムスキーは、アメリカこそが「テロの親玉」と名指ししたが、冷戦後の圧倒的な軍事力を背景としたアメリカの覇権とアメリカ化とも言うべきグローバリゼーションをローマ帝国になぞらえて「帝国」と概念化する動きがある。イタリアのラディカルな思想家であり活動家でもあるアントニオ・ネグリの著作『帝国』の問題提起である。私自身はその著作を読んでいないので、今の時点では何の評価もできないが、学生時代に親しんだ「米国帝国主義」、「ベイテイ」という言葉を使いたくなる。

「9・11」事件の真相がなんであれ、アメリカはアフガン戦争のおかげで経済は持ち直した。まさにアイゼンハワー大統領が喝破したように、アメリカは「軍産複合体」による「戦争国家」、「死の商人」に成り下がった。ブッシュ父大統領の閣僚をそのまま抱いた子ブッシュ大統領は父の宿題とも言えるイラクのサダム・フセイン大統領打倒に燃えている。皮肉なこと、イラクのサダム・フセインも、オサマ・ビン・ラディンも、それぞれ対イラン、対ソ連打倒のためにアメリカが育てた「フランケンシュタイン」なのだ。

「文明の衝突」

アメリカの政治学者ハンティントンはイスラム教とキリスト教の文明の衝突を警告した。そして現在の状況は彼の予言が当たっているかのように見えるし、またマスメディアや多くの識者は「文明の衝突」を論じている。

しかしながら、この「文明の衝突」論はもっぱら西側、とくにアメリカやヨーロッパ、そしてそれに追従する日本などで論じられている。イスラム圏ではむしろ、「悪の枢軸」と名指しされたイランのハタミ大統領などは、これに対して「文明の対話」を呼びかけている。

ここで注意したいのは、欧米の植民地支配時代からのイデオロギーである「文明」という概念である。「野蛮」な非西欧諸国を「文明化」するために「植民地支配」を正当化する。そしてそのイデオロギーはキリスト教に裏打ちされている。

イスラム教に対しても、その文明と金銀財宝を狙って、古くは十字軍を送った。それは歴史的に失敗に終わったのだが、ブッシュは思わず今回の反「テロ」戦争を「十字軍」と口走った。本音が出たのだろう。現在、イスラム教の方が、キリスト教より信者の数は多い。ある意味で「文明の衝突」をキリスト教圏が仕掛

けている背景が見えてくるのではないだろうか。「文明の衝突」論に見られる「侵略」のイデオロギー、とりわけキリスト教の「侵略」の歴史についてはもっともっと議論されても良いのではないか。本会に期待したい。

「人種差別撤廃世界会議」の問題提起

二〇〇一年八月末、南アフリカ、ダーバンで国連の「人種差別撤廃世界会議」が開かれた。日本のマスコミはあまり報道しなかったが、この会議では、今日のグローバル化、西欧を中心にした資本主義のグローバル化の根に西欧を中心とした奴隷貿易と植民地支配の歴史がある、と指摘し、謝罪と共に賠償を初めて求めた歴史的な会議であった。しかし、イスラエルのパレスチナ抑圧を非難するかどうかで会議はもめ、奴隷制に対する謝罪と賠償の問題で、イスラエルとアメリカは会議から退席した。結局、会議ではイスラエルのパレスチナ政策を非難することも奴隷制に対する賠償も行うことにはならなかった。

そして会議が奴隷制と植民地支配に対して西側から十分な反省を引き出すことなく終わった直後、「9・11」が起きた。このようにダーバン会議と「9・11テロ」との関連を説く意見があることに注目すべきだろう（国際政治学者、武者小路公秀『アソシエ』第八号より）。

そしてイスラエルは、「9・11テロ」以降、アラファトPLO議長を「テロリスト」と呼び、パレスチナ攻撃を反「テロ」行動と位置づけ、無差別攻撃を強め、全面戦争を仕掛けている。

パレスチナ問題は、「帝国主義者の植民地建設」とアラブ人はイスラエルを非難している。

一九二三年、シオニスト、ゼエブ・ヤボティンスキーは論文「鉄の壁」で、シオニストの目的を「われわれが目指すのは植民地の建設である」として、「原住民が突き破ることのできない鉄の壁で」植民地建設を進めるべきであるとしている（奈良本英佑著『君はパレスチナを知っているか』ほるぷ出版）。

イスラエルにしてみれば、「ホロコースト」をしたり見過ごした欧米に対して、彼らと同じ植民地建設をして何が悪いと開き直っているわけだ。ユダヤ教の人びとも決定的に欧米の観点に立っていて、アラブや第三世界に対する視野はまったくない。

「帝国」のフェミニズム

さて、今回の「9・11テロ」とその後のアフガン攻撃に対して、フェミニズムはどう対応したのか、最後

にそれを見てみたい。

アメリカのフェミニストはアフガン攻撃に対して反対の声を上げることはできなかった。むしろ評論家スーザン・ソンタグら少数の、とくにフェミニストとは称しない人びとから反対の声が上がった。

反対どころか、タリバン政権は女性抑圧政策をとっているので賛成の声を上げるフェミニストもいたのである。そしてブッシュ大統領夫人とブレア英国首相夫人は、亡命アフガン女性とともに、アフガン攻撃はアフガン女性解放のためである、と空爆を讃えたのだ。戦争翼賛のためにフェミニズムは利用され、また積極的にチアガールを務めたのである。

ロサンゼルスのフェミニスト団体「フェミニスト・マジョリティ」はこの間、アフガン女性解放のため、タリバンの女性政策を批判し、政治的ロビー活動を続けている。たとえば、米国のアフガン政策の隠れた目的である、カスピ海の石油・天然ガスパイプライン設置構想に反対して、計画を進めているソーカル社でピケまで張って、計画を棚上げに追い込んでいる。「フェミニスト・マジョリティ」がどのような団体で背景にどのような政治的思惑があるかわからないが、アフガン攻撃でアフガンの女性は解放されたのだろうか。私はアメリカのフェミニストにそれを問いたい。

アメリカやヨーロッパのフェミニズムがどうもおかしい、と思われるようになったのは、一九九一年の湾岸戦争と、九〇年代のユーゴスラビア内戦の時からであろう。その時期、女性兵士の参戦要求も出ている。

ＮＯＷ（全米女性機構）は、女性兵士も男性兵士と同じように前線に出て戦うべきだと戦闘要求を出し、湾岸戦争には反対しなかった。米主導ＮＡＴＯのユーゴ空爆によって、ユーゴスラビアは解体されたが、アメリカのフェミニスト法学者キャサリン・マッキノンは、ＮＡＴＯの空爆は遅かった、もっと早くユーゴを空爆すべきだった、と日本で今年初め発言した。さらに、ボスニア・ヘルチェゴビナにおける「民族浄化レイプ収容所」告発のため、ユーゴを裁く「国連戦争犯罪法廷」設立に尽力した、と自慢げに話したのである。

ところで、ボスニア・ヘルチェゴビナでの「民族浄化レイプ収容所」というセンセーショナルな話は、西側ジャーナリストの捏造であると暴かれた。そして、アメリカのＰＲ会社が、かの政府に雇われてユーゴ、セルビア人を悪者にする国際世論を作るために、「民族浄化（エスニック・クレンジング）」というキャッチ・コピーをナチスから借用して情報戦争をしたとＮＨＫでも報道された。湾岸戦争の時の、「石油で塗れた水鳥」の映像や駐米クエート大使の娘がアメリカの議会で、侵略してきたイラク兵が病院を襲い、赤ん坊を虐殺し、女性をレイプした、という作り話を涙ながらに

語ったが、それもクエート政府に雇われた米PR会社の広報戦略であった。

もちろん、旧ユーゴでレイプがなかった、といっているのではない。レイプはあったし、民族同士が互いに争い、ひどい虐殺が行われた。しかしそれらはセルビア人だけがやったわけではない。ユーゴに対する空爆で平和が訪れたのだろうか。ユーゴスラビア内戦の全体像を知ったうえで、マッキノンは国連に旧ユーゴ戦犯法廷の設置を働きかけたのであろうか。それを問いたい。彼女たちのセルビア人の戦時下における強姦を裁く運動が、ともすれば、アメリカの戦略に沿ったもので、一方だけを裁くことになっていることが気になる。また、その流れで、国際刑事裁判所の設置を求める運動が国際的にある。日本の女性たちも、従軍慰安婦問題を裁く女性国際法廷を開き、国際刑事裁判所の設置を求めた。だがしかし、それがミロシェビッチ前旧ユーゴ大統領を裁くという茶番にならないか。アメリカの「帝国」の正義だけがまかり通る結果にならないのか、大いに疑問である。

日本で開かれたアフガン復興会議は、成功であったとたたえられるが、アフガンを荒廃させたアメリカの空爆を問わなかった。アフガニスタンを侵略した旧ソ連も問わなかった。またもとを正せば、一九、二〇世紀のイギリスの対アフガン侵略戦争から近代のアフガニスタンの苦悩が始まっているのに、それを問う声もあまりなかった。

「帝国」アメリカは反「テロ」戦争を世界に仕掛けている。私たちはアメリカに倣って「帝国」のフェミニストになるのだろうか。

本会に即して言えば、「宗教」あるいはその「正義」の名の下の「帝国」の軍事暴走を止め、私たちフェミニストが「平和」を作れるか、歴史的に問われているだろう。

戦争のグローバリゼーション

横山　杉子

米国で同時多発テロが起こってから五ヶ月になる。今朝（二月一〇日）の新聞はブッシュ米大統領がソールトレイクシティで開かれている冬季オリンピック開会式に出席して、米国選手団に囲まれて開幕を宣言する姿を報じている。そこにはテロとの戦いの中、万全の警備体制をしき、オリンピックを開催した強い米国が誇示されている。

九月一一日後、世界貿易センターに飛行機が突っ込む場面がいやになるほど度々放映され、その非人道性が繰り返し、繰り返し叫ばれた。犠牲者に対する哀悼と国民の団結、テロ根絶に対するブッシュ大統領のなみなみならぬ決意、正義のための戦争、首謀者オサマ・ビン・ラディンとテロ組織アルカイダの掃討、それを助けているタリバン政権打倒等々の米国政府の発言がマスメディアにのって喧伝された。しかし、なぜ多発テロが起こったのかについては、ブッシュ大統領も、共に行動を起こしたブレア英首相も何も触れていない。ある識者はそれは民主主義への挑戦だと言い、別の者は文明間の衝突だと主張する。しかし、これまで米国が、そしてその同盟国が世界の中で何をしてきたかを知る人々はこの事件の本質を見抜いていた。

米国がアフガニスタン攻撃を開始すると、テレビは連日その様子を放映した。過去20年余りの間戦争と飢餓と抑圧に苦しんできたアフガニスタンの難民の姿が痛々しい。米国の激しい空爆と北部同盟側の攻撃が進む中、米軍の誤爆により住んでいた家が破壊され、妻と子供たちを失った若い父親が涙を流している状景が映し出された。米国人最初の犠牲者の柩が星条旗に包まれて本国に帰還するのとは対照的に、誤爆により殺された幼い命の墓は荒野に置かれた小さな石ころひとつずつだけだった。私はフィリス・トリブルの『悲しみの女たち』を思い出した。

ある日テレビを見ていた私は、偶然そこに昔教えたことのあるパレスチナ出身の学生が九月一一日のテロについてインタビューを受けている場面に出くわした。彼はテロ行為を否定しながらも、パレスチナの悲惨な現状に言及し、日本の、そして世界の人々がもうひとつの視点からこのテロ事件を考えて欲しいと強い口調で訴えていた。（この問題も、パレスチナとイスラエルの紛争の背後にあるもの――例えば、イスラエルと石油――を見なければ、なぜ絶え間ない衝突が起こるのか根元的に理解できないだろう。しかし、今回のテロはイスラエルにパレスチナ攻撃のための絶好の口実を与えた。そして、攻撃はすぐに実行された。）彼は文部省の奨学金を得て、日本の国立大学で博士号を取り、現在日本の会社で働いている。数日後私は彼に会った。もうじき三人目の子供が生まれるが、故郷のナブルスへは、子供たちのことを思うと危険で、帰りたくても帰れないと言う。（これを書いているときも、ナブルス爆撃で数人の犠牲者が出た。）

一一月末文芸春秋社から『9・11』という小さな翻訳本が出た。これはニューヨーク・タイムズ紙のベストセラー・リストに載ったそうだ。著者であるユダヤ系アメリカ人ノーム・チョムスキーは生成文法で世界的に有名な言語学者でもある。かつてベトナム戦争の

折に戦争反対の論を張って、私たち言語学の世界でしか彼を知らなかった者たちは驚いたものであった。今回その著書の中でチョムスキーはアメリカ合衆国自身が「テロ国家の親玉だ」と論証するのである。

その最も明白な例として、ニカラグアにおいてアメリカは何をしてきたかが語られる。かつて米国はニカラグアの左翼政権を倒すために、その国の右翼政権を支援して、内戦を引き起こさせた。何万もの人々が犠牲になり、国は壊滅状態に陥った。ニカラグアはテロで報復するのではなく、国際司法裁判所に訴えるという手段をとった。その結果、一九八六年に米国は国際司法裁判所で「無法な力の使用」（つまり国際テロ）の廉で有罪を宣告され、賠償金の支払いが命じられたのにもかかわらず、それを認めず攻撃をエスカレートさせた。ニカラグアは今度は安全保障理事会に訴えた。しかし、米国は国際法遵守を求める安全保障理事会の決議に拒否権を発動して決議案を葬り去ったのである。米国は国際司法裁判所が国際テロで有罪判決を下した唯一の国である。

その他の例として、一九八五年レーガン政府がベイルートで起こした爆弾テロ（死者八〇名、負傷者二五〇名、その大半が女性と子ども）、イラク攻撃、イスラエルのテロ活動の支援、トルコが自国のクルド人を撲滅するのをクリントン政府が支援（武器の八〇％）、スーダンで一九九八年八月クリントンが行ったアル・シーファ薬品工場（スーダンの主要な薬品の九〇％を生産していた）の破壊などが述べられている。

一九九八年八月私はニュージャージーにいる娘を訪ね、米国にいた。避暑地の町の本屋にはゴシップの類の本がショーウインドーを飾っていた。米国人の友人たちはクリントン不倫問題にうんざりしていた。そこへ突然スーダンへのミサイル攻撃のニュースが入った。「クリントンは、テロリストに対して行ったミサイル攻撃で不倫問題から国民の目を反らそうとしている」とある新聞は書きたてた。この破壊行為がどんな結末をもたらしたか、その結果何万、何十万人の無辜の人々が犠牲になったか、彼らの苦難、悲惨をどれほどの人が認識しただろうか。

昨年暮れドイツのエコロジー・フェミニストであるマリア・ミースを迎え、明治学院でシンポジウムが催された。私は聞きに行けなかったが、「戦争システムとしてのグローバル化」と題した彼女の基調報告を読んだ。

ミースによれば、グローバリゼーションとは単なる自由貿易の進展ではなく、新植民地主義の展開である。貿易の自由化やＩＭＦや世界銀行が推進している政策は、かつて東インド会社が行っていた植民地化の方針とまったく変わっていない。一九九〇年以降、植民地

的な収奪、強奪、戦争が引き起こされた。それは米国の権益を確保するために世界の各地を戦場に変えていく戦争のグローバリゼーションの展開である。アフガニスタンでの戦争は、まさに米国の一極支配の下にG8諸国のグローバル化された経済における経済権益をさらに増大させ、これを守るという目的に即した戦争である。その裏に石油の経済権益を得るという目的が潜んでいる。したがって、戦争の終結だけに目を向けるのでは不十分であり、現在起こっている戦争が自由貿易の名の下に再植民地化を迫っていることを認識する必要がある。ミースの分析は以上のようなものである。

ここまで書いたとき、ブッシュ米大統領が来日した。毎日新聞によれば、明治神宮に参拝したブッシュは小泉首相から「悪」と戦う姿を表す、流鏑馬の馬に乗って（三つの的の絵は「悪の枢軸」三国か？）矢を射る彼の武士姿の肖像画を贈られて、上機嫌だったそうだ。「世界には武器を開発し、米国や同盟国に被害を与えようとしている国がある。阻止しなければいけない」と言うブッシュの発言に、小泉首相は「イラクには国際社会が協力して取り組むことが重要だ。テロとの戦いでは日本は常に米国と共にある」と応じた、とある。

また、新聞には次のような記事もあった。川口外相がパウエル米国務長官と会談し、外相は「ミサイル防衛を含め安保に関する日米対話をさらに強化したい」と安全保障対話の強化を訴えた。パウエル長官は「ABM（弾道弾迎撃ミサイル）制限条約からの脱退決定で、ミサイル防衛の推進の機会を開いた」と述べ、ミサイル防衛推進に意欲を示した。

同時多発テロ後に起こった報復戦争が何であるかを問うことによって、その背後に潜むものが明らかになり、私たちはもう一度自分たちが現在いる場所を確認することができたのではないか。グローバリゼーションの展開のためには、かつての帝国主義に替って、国家主権を超えたグローバルな帝国の秩序の確立が求められる。米国の軍事戦略はそのために欠くことのできないものとなる。これは必然的に世界の人々を巻き込むと同時に、そこに差別や排除も起こってくる。（このグローバル化は単に経済面での格差の拡大にとどまらず、その価値基準は人間の心身までをもコントロールしようとする。）日本政府の米国への追随は私たちの知るとおりである。このようなグローバル資本主義の、歯止めの利かない利潤追求の展開の流れのなかに私たちは身を置いているのである。

「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（新約聖書　ルカによる福音書 16:13）

女と国家―観念による呪縛

B 三つ巴の性（二）

河野　信子

若い女　第三の性といわれる存在には、人の第二三染色体のうちXO・XXY・XYY・XXXなどの人々と、両性具有者たち、変成男子、変成女子たちがあります。

この存在の基盤を存在学へと追求することに「三つ巴の性」の意味があるのではないでしょうか。

老　婆　意味があるかどうかは、わかりません。意味にすがりつくより前に、事態より発せられるメッセージを担い手たちの語ろうとして語り得なかった場をも含めて、内奥にある真実を模索する必要がありそうです。

両性具有者・変成男子・変成女子については、文学作品の主題、説話の主題、宗教書の記述になっておりましょう。この領域と、生理的基盤については、後続するテーマといたしまして、まずは、第二三染色体のカオス状態のなかで、XOとなっている人々の瞠目すべき行動についてお話しくださいませ。

若い女　ここに『ターナー女性―本人と家族のために』（ターナー女性を支える医師の会著　メディカルレビュー社　一九九九年）がございます。

以前はXOの人々は、「ターナー症候群」と呼ばれていました。現在では「病気」というよりも体質の一種と考えることから、「ターナー女性」といっています。ターナー女性の会は、宮城・東京・長野・静岡・愛知・大阪・広島・長崎・熊本・沖縄などの各県にございます。また「ターナー女性を支える医師の会」も一八ヶ所の病院にございます。

医師と本人と家族を超える拡がりについては、まだわかりません。

老　婆　ああよかった。女と男とは、いまだに女性原理と男性原理の極北から、言い下す残虐性があります。また性的アピールを、いやが上にも増大させようとするところもあります。女と男の間には、生理学的にみても心理学的にみても、グレー・ゾーンがあるのです。

若い女　ターナー女性の人々も「いじめられた」と書いておられます。無知から出発したいじめもあれば、情報を得たことで一層いじめることもありますとか。

老　婆　巷に時折見かけるタオ・マーク（老荘思想に発したタオイズムのシンボル）にも、陽のなかにも陰があり、陰のなかにも陽があるとなっているではありませんか。

女性原理を内部に持たない男性原理も、男性原理を

内に持たない女性原理も、ともに、危険な反自然性を持っていますでしょう。

若い女　ただの体質の差で、不妊なだけならば、そっとしておいた方がよい。この世には、ＸＯでなくても、不妊の人びとは沢山いるのだからと言う人々もいます。

老　婆　沈黙のなかに閉ざして生き抜くか。自己の無言の底に、深渕を見るか、それは個人の自由な意志によるしかないと言って言えないことはございませんが、生命体の性差には、にじみ出す境界があることを、納得して、自らを解き放し、仲間を作ることで癒しにむかう面もあります。

　医師達の治療の方向はどこにありますか。

若い女　まず成長ホルモンを幼児期に注射し続けること。現在では、身長一五三センチだと、ターナー女性が書いておられます。これには副作用がほとんど見られません。いっぽうの性ホルモンは副作用が激しくて、安易に使うことは現在では奨められないようです。

（ここの項つづく）

2001年 活動報告

1.12　例会「1920年代における台湾の女性運動からみた日本の女性たち」
　　講師　石塚友子（ジャーナリスト）
3月　Womanspirit第31号発行
3.13　例会「同性愛者を“見えない存在”“身近な隣人”とするために」
　　講師　鍛冶良実（アイデンティティハウス主宰）
7.19　例会
　　「なぜ日本にフェミニズムは根づかないのか―北欧視察から感じたこと」
　　講師　富永誠治（男も女も育児時間を！　連絡会）
10月　Womanspirit第32号発行

（2001年の例会は宮澤邦子、千葉悦子さんが担当してくださいました。）

男性僧侶のアイデンティティー？

日比野由利

昨年の一一月一三日に開かれたフェミニズム・宗教・平和の会の例会で、熊本英人氏が仏教教団における女性の地位について話された。その時に配られたレジュメは今ではもう失われてしまったので、定かなことは言えないが、寺族（女性）たちや女性僧侶たちが教団内で受けている差別の実態について明らかにし、それを男性僧侶のアイデンティティーの問題として考察する、という主旨に基づいたものであったと記憶している。おそらくは、このような問題に興味を持ち、真摯な姿勢で取り組んでおられる男性僧侶は、曹洞宗内でも、氏の他にそう多くはあるまいと思う。被差別者の側に共感し、彼らが置かれた状況に対して理解力を示せるということは、かなりの知性と想像力がなければできることではない。氏の他にも、そのような人物が皆無ではないと思うけれども、私はそうした能力の持ち主に出会う度にかえって驚きを感じてしまう。それだけ、私たちの周囲には被差別者に対する無知＝無関心がはびこっているということかもしれない。またさらに、氏は、私の感じ取った限りでは、男性僧侶でありながら、その特権的な地位を利用して、女性問題のスポークスマンであることを自認し、彼女たちを表象＝代弁してしまう家父長制の擁護者などではない。ところが（あるいは、そのためにというべきか）、氏は男性僧侶であるという自らの立場性を考えられ、「女性問題の代弁者」になってはいけないという配慮をされたのであろうか、教団内で抑圧された女性たちに対して、「もっと声を挙げて欲しい」というメッセージを発せられた。そのような気持ちを抱いてしまう氏のもどかしい気持ちに対しては、その場にいた私もまったく同感であった。

しかし同時に、私はその言葉に対して少なからず違和感を覚えたのも事実である。寺族や女性僧侶を絶対的な弱者と規定することはできないが、しかし、男性僧侶に対して相対的に弱者の地位に置かれている寺族や女性僧侶たちに「語る」ことを強要することにも繋がりかねない危険性を、そこに感じたからである。実際、氏のこの言葉に対して、このように感じたのは私だけではなかったらしい。その場に居合わせた人（とりわけ寺族たち当事者）からの異論が挙がったのである。寺族、とりわけ僧侶の妻たちは、自らの抑圧された状況に気づいていないわけではない。しかしそれを告発するならば、夫婦関係の破綻を導く可能性が存在する。つまり、そうした危険性にもかかわらず敢えて

意義を唱えるということは、自らの生活の基盤を失うことを覚悟しなければならない場合すらある、ということである。このような場合、彼女たちは、黙って抑圧に耐えて人生をやり過ごすか、あるいは住み慣れた場所から追い出されることを覚悟で抗議に臨むかしかない。後者を選ぶ場合、何人かが集まって行動を起こすということは、確かに一つの有効な方法ではある。しかし、ここでも、彼女たちは、より広い範囲での周囲の嘲笑や妨害を、覚悟しなければならない。時には、それによって心身に深刻な緊張を強いられることすらある。弱者が直面しているこうした現実的な恐れを、相対的に強い立場にある者は日々、感じなくてすんでいる。そして、そうした特権的な高みから事態を眺めた時、敢えて意義申し立てすることをせず、寡黙に生きることを選んだ彼女たちの選択を、過小評価する危険性が出てくるかもしれない。その結果、彼女たちを「家父長制の積極的協力者」あるいは、よくて「家父長制の犠牲者」などと表象してしまうことで、かえって家父長制に加担してしまうことになるかもしれない(私は、今のところ寺族ではないし女性僧侶でもない。身近な親族や知人に該当者もいない。したがって、あらゆる利害関係から自由であるという意味で特権的な高みに立ちうる者の一人であるかもしれない)。

こうした落とし穴のすべてを逃れて寺族や女性僧侶たちの抑圧を少しでも減じる方策を考え出すことは、なかなか難しい。とりわけ、氏の場合は、男性僧侶として彼女たちに対しては、より特権的な立場に立つ者として現れざるをえない。しかし、私が氏の発表の中で興味を引かれたのは、むしろ、「男性僧侶のアイデンティティー」という氏の問題意識の方なのである。女性問題を論ずることで生じる、氏の男性僧侶としてのアイデンティティーとは如何なるものなのだろうか？　発表において十分には明らかにされなかったこの問題を、私は知りたいと思う。たとえば、氏は、男性僧侶にはドメスティック・バイオレンス（ＤＶ）の加害者が多い、ということを漏らされた。もしこれが事実だとしたなら、それが意味することは大きいと私は思う。つまり、一見、寺族や女性僧侶、あるいは檀信徒に対しては絶対的な優位を持ちえているかに思える男性僧侶においても、何らかの力によって深刻な葛藤が生じており男性僧侶としてのアイデンティティーはかなりの程度、揺るがされているということの証左になるだろう。さらには、男性僧侶のセクシュアリティの問題も重要であろう。こうした問題は、まだ全くといってよいほど手がつけられていないのではないかと思う。男性僧侶に対して、「家父長制の権化」などと一枚岩な表象を与えてしまわないためにも、「男性僧侶のアイデンティティー」を明らかにする作業は、必

要なのではないかと思う。今後、こうした領域での氏の成果を是非、目にしてみたいものだと思う。

チュウイ、チュウイ

勝又　美保

「九月一一日」の事件とそれに続く米国側の報復についてタイ人の反応は一体どんなものかということですが、一般化は難しいですが（特にタイ語の得意でない私にとって…）、私なりの感想を述べますと、どうも彼らの心境はタイトルの言葉に集約されているように思えるのです。「チュウイ、チュウイ」とは、「マイペンライ」（「気にしないで」、「どういしたしまして」）と合わせて、よくタイ人が好んで使う言葉の一つですが、大まかに言うと「ボーとしている」とか、「別にこだわらない」という意味を持つものです。本稿では、「九月一一日」の事件からは、直接的には外れるかもしれませんが、この「チュウイ、チュウイ」という言葉を一つのキーワードに、タイ人の国民性、延いては異文化価値について少し考えてみたいと思います。

タイ人は、本当に大らかな人々といえます。街を歩いていても、人々が大声で叫んだり、議論をしているところなど、ほとんど見たことがありません。私の職場である学校でも、又、家庭においても、教師や親が大声を上げて子供を叱っている様に出合ったことは一度もありません。とは言え、大人が子供に甘いということではなく、教師にいたっては、日本よりも権威主義的なところがあるくらいです。要するに、この国では、今の日本の言葉でいうような「キレル」という状況が非常に悪いことと捉えられており、「冷静」であるということが大切な美徳の一つとされているのです。恋愛においてもそうです。恋愛関係にあっても、お互いに非常に遠慮しあいます。（「遠慮＝グレンチャイ」という言葉もタイ人を知る一つのキーワードです）電話を頻繁にしあったり、デートをたくさんしたりという恋人として当然のことと思われるようなことでも、あまり求めすぎると性急すぎると思われます。遠距離恋愛の場合は（国内であっても）電話は二、三週間（下手すると一ヶ月）に一回が普通。二、三ヶ月、下手すると国内に住んでいても一年以上も会っていないカップルもいます。「少し愛して、長く愛して」という諺がタイにあるくらいなのです。

大らかである、冷静であるということは何も悪いことではないでしょう。しかし、外国人の目からすると

理解できない範囲までが全て「マイペンライ」（気にしない）で済まされてしまうことがよくあり、日本人の私としてはついつい、腹を立てがちになってしまいます。彼らにとってみれば、こんな私は、「せっかち」者に他ならず、よい顔をされません。「ジャイローン」という言葉がタイ語にはありますが、これは直訳すると「熱い心」というもので、怒りっぽい人を表すときに使う言葉であり、「ジャイローン」とは、前述の通り、タイ人が最も嫌う性格なのです。「ジャイローン」の反対語は「ジャイエーン」ですが、直訳すると「冷たい心」という意味で、妙なことにこの「ジャイエーン」という言葉には否定的な意味はないのです。

よく、私がタイ人に対して、「これはおかしい。変革しなければならない。なぜタイ人は、物事を変えようとしないのか!!」（こんなことを言う私は日本人的ではないのかもしれませんが…。）と言って、真剣な目で主張していると、しばらくキョトーンとした目で見つめられ、その後満面の微笑みで「ミホ、ジャイエン、エン！」とかえって諭されてしまうことがあります。こういったやり取りの後でも、何ヶ月か前までは、「カッカ」と心を燃やして、立ち向かっていた私でしたが、最近は私も大分「ジャイエン」になってきたようです。（と自分では思っています）この国での生活がようやく一年経った今では、彼らの国民性を「のんびり屋」とか「中道派」とかいった言葉で規定化してしまおうとする自分が、彼らによってどう捉えられているのかということをもっと考えてみる必要があるのではないかと、やっと思える余裕が出てきたのかもしれません。

さて、一般的に日本人も自分の意見をはっきり述べないということで悪名高いですが、そういった意味では、タイ人は日本人に似ていると言えます。日本人がこの国で最も人気のある国民として慕われている（これは本当に事実です！　日本人がこんなに「楽に」暮らせる外国は他にはないと思います。だからこそ色んな問題も起こっているといえると思います）のはこういった理由によるものかもしれません。しかし、この「意見をはっきり述べない」という性質も全く同質の部類のものではないように私には感じられます。「意見をはっきり述べようとしない」心理の根底には、それぞれ異なった理由が存在しているように思うのです。

私が考えるに（又、多分多くの文化人類学者？　も考えるように）「人にどう思われるかが一番の関心ごと」でありがちな日本人にとっては、意見を述べることで「相手がどう反応するか」ということを常に考えてしまう。「嫌われてしまったら困る」とすぐさま懸念してしまうのが日本人なのではないかと思います。

しかし、タイ人にとっては、まず「ジャイエン」という一つの文化価値があり、衝突することをなるべく予め避けようとする他への「気遣い」が先に働いているのではないかと私には思えるのです。全くの個人的分析に他なりません…。

以上のようなことから考えますと、以前、当会で取り上げられたテーマ、「宗教と性意識」の一連の議論の中にあった「告発に向かわないメンタリティーと(タイ)仏教」の関係も、国民性と宗教がどこまで関連しているのかという議論はさておき、いささか理解できることかと思います。無論、一九七六年のタマサート大での民主化運動という勇気有る学生運動のような例もあるわけですから、タイ人がいつもじっと「黙って」いるわけではありませんが。

さて、九月一一日についてタイの人々がどう考えているのかについての大事な結論の部分が最後の最後となってしまいましたが、彼らの反応は、大まかに言って、日本と似通っているものかと思われます。(と私は思います。日本の新聞を時々目に通すくらいですので、実際日本人が一般的にどう考えているのか、はっきりわからないところもありますが)「テロは悪い。でも、アメリカの報復も非人道的だ。でも、実際どうしよう…??」といった具合ではないでしょうか。ややもするとタイ人の方がもっとのんびり構えているかもしれません。但し、日本に比べれば、イスラム教徒定住者が多いこの国ですから、私の住むチェンマイでもイスラム教の人々が、ビラディンの写真を掲げ、アメリカの報復に反対するデモ行進を行っているのは一度見かけました。又、悲しいことに、お金のためなら何でもやってしまいがちなこの国ならではか、今でも時々ビラディンのTシャツが街角で売られているのを見かけることがありますが、日本でもそんなことがあるのでしょうか。

国民性の一般化は非常に怖いことは周知の通りですが、それでも敢えて一般化すると、やはり、タイ人は「チュウイ、チュウイ」の人々であると私には思えます。(ある意味で)正義感が強く「告発」の神様みたいなアメリカのような国からすれば、こういった態度は憤慨極まりないものとして受け止められるのでしょう。しかし、「正義」とは一体何なのでしょうか。「正義」を主張するために行き過ぎてしまったのがアメリカの報復ではなかったのでしょうか。時に「正義」という立派に見える物差しで人々は計られ、振り分けられ、粉々にされてしまう。「正しさ」が人をかえって傷つけてしまうことがあります。

とはいえ、一方で「正義感」のなさすぎる、「チュウイチュウイ」のタイ人の態度が(特にこんなにエイズ大国として騒がれている今となっても、未だにコン

ドームをせずにエイズ菌を振りまいているだらしない男性たち）ＨＩＶ感染者を多く生んでいるのも事実です。ということで、異文化価値間の中で、私はこれからも悩み続けていくことだろうと思いますが、とりあえず、気が強く、怒りっぽい私は、タイ人から、「ジャイ、エンエン」の哲学を学ぶことをしばらくの課題としなければならないと思っています。

本の紹介

『ジェンダーフリーを共同で学ぶ』（新水社）

下村美恵子

『ジェンダーフリーを共同で学ぶ』というタイトルで刊行した学習記録が編まれた直接の動機は、「共同学習」の「楽しさ」と「ままならなさ」の交錯した学習の終わり方に、何となく収まりの悪さを感じたということがあったかと思う。その舞台裏のできごとを、だれかと共有したいという気持ちが著者の女性たちによぎったことは間違いない。しかも私はこう思う、と「私」を主語にして、思ったことを相対化、客観化して自分の意見表明をし、自分の意見に責任を持つという意味で書き手の実名も出している。

これは私が平成十三年三月末まで勤務していた、足立区女性総合センター主催事業「学習をつくる実践講座」（全二十回）の受講修了者によって記録化されたものである。受講者は全部で二十一名だったが、そのうちの七名が編集に携わった。

いままでジェンダーの視点で活躍してきたであろうと思っていた女性たちが、書き手の著者たちによって実はそうではなかったということを発見したり、それはなぜだったのかを考えながら、もし自分だったらどうだったかに結び付け、学んで行動していく難しさを実感していくものとなっている。

そうは言っても、この本がごく普通のまだ学習途上にある女性たちの素朴な語りである側面と、この記録を世に出したことの新たな視点からの検証はこれからだと思っている。

新入会員紹介

私は、浄土真宗本願寺派の坊守であり、僧侶です。

真宗寺院の特色は、宗祖親鸞聖人の結婚による寺族女性の存在です。宗祖とその妻恵信尼公の生き方は、現代の「男女共同参画」のありかたを示された先駆的存在と思います。しかし、残念な事に、教団は、ながい歴史と伝統や古いしきたりの中で、男性中心の方向性をたどってきました。今、教団の構成員の半数である女性の声は、どこにも届かないものとなっています。またその教えも、男性が女性を教化するという男性指導型のものとなり、女性の視点からの点検が必要だとおもっています。21世紀の教団は、あらゆる面で女性が男性と対等な構成員としての自覚が望まれると思います。多くの方々の声に学んでいきたいと思います。よろしくおねがいします。

（菊城レイ子）

2001年会計報告

＜収入＞	
繰越	240,692
年会費	240,000
冊子売上	29,920
集会参加費	15,000
合計	525,612
＜支出＞	
印刷費	162,000
通信費	65,070
講師謝礼	42,650
施設費	4,000
文具	960
資料代	3,000
合計	277,680
現在高	247,932

編集後記

今号は9・11以後をどう考えるかについて特集しました。「同時多発テロ」とその後のことについては、マスメディアを通じて私たちは大量の報道に接しましたが、その多くがアメリカ寄りの一面的な報道という印象を拭えませんでした。そこで、私たち宗教に関わる普通の市民が、マスメディアの報道とは違った視点で、この問題を考えようとしていることを記録しておくのも意味のあることだと考えました。重複する部分もありますが、それぞれの執筆者によってさまざまな視点が提示されたと思います。

イスラム教については私たちもこれまであまり知る機会がありませんでしたので、三月の例会では筑波大の塩尻和子さんに「イスラームの女性像」について話していただきました。大変内容の濃い、有意義なお話で、参加者からも大好評でした。

今号の編集は小松加代子さんと奥田暁子が担当しました。執筆依頼から原稿の催促、再催促まで、小松さんの奮闘のおかげで、ようやく発行にこぎつけることができました。

（奥田暁子）

Womanspirit No. 33

2002年3月発行
発　　行　フェミニズム・宗教・平和の会
連 絡 先　〒180-0014
武蔵野市関前５－５－２５
Ｔ／Ｆ 0422(53)8746
E-mail Akikovv@aol.com
http://www.josei.com/womanspirit/
郵便振替　00170-9-8031
定　　価　700円
印　　刷　㈲オクノプリント社